レッスン：５“M”

テーマ：ミクロコスモス

MAC5.DOC/ENM

私の兄弟・姉妹たち、

スピリット、光、火の子供たちよ。私達は常に、神、絶対、神の聖性の中に抱かれています。

前のレッスンでは、全てがその中に“在り”（Is）、そこから投射と現れの力が出てくる絶対意識セルフ・エピグノーシスとしての絶対存在、神について述べました。

汎宇宙ロゴス、聖霊としての絶対存在について述べました。また、マインドは創造の諸世界を築き、維持するために必要なファクターであり、マインドを通じてLifeの表現およびLifeの現象が可能となる、と述べました。マインドには意識があり、マインドはそれを創造した法則自体であり、マインドは神の黙想と聖なるブレーシス（＊神の意志）の結果です。

私達はマクロコスモスについて述べ、それは最大のものから最小のものまで全てであり、マクロコスモスとして創造の諸世界があると説明しました。さらに、メゾコスモスについても述べ、そこには惑星である地球およびLifeの現象の諸世界が含まれる、と述べました。

地球は７つのエレメントから成っており、トリアクティス（Triactis）と呼ばれる最初の３つはダブル・エーテリック（エーテル体）を構成し、他の４つのエレメントはテトラクティス（Tetractis）として知られています。人間によって知られているこれら４つのエレメントは土・水・空気・火です。

私達は今やミクロコスモスに到達し、そのようなものとしてミクロコスモスである人間が存在します。ミクロコスモスとしての人間は主なる父のアイコン(icon)であり、主なる父に類似しています。マクロコスモスの如くミクロコスモスもそうである。上の如く下もしかり。絶対存在、キリスト・ロゴス、聖霊と創造界の如く、聖なるモナドである人間、魂のセルフ・エピグノーシス、永遠のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシス、現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスもそうなっています。質的に見ると、ミクロコスモスとしての人間は主なる父の似姿なのですが、もちろん量的には違います。

三位一体である絶対存在。絶対英知・絶対パワー・絶対善として三位一体である絶対存在、主なる父。絶対善・絶対英知・絶対パワーとして三位一体である絶対存在キリスト・ロゴス。絶対パワー・絶対英知・絶対善として三位一体である絶対存在としての聖霊。人間もまた、聖なるモナド、ロゴス的現れ、および聖霊的現れである魂のセルフ・エピグノーシスとして三位一体なのです。

それ自身の一部を人間のイデアを通じて投射することを決意した聖なるモナドは、最終的には、それ自身の一部をミクロコスモスとしての人間、Lifeの現象として実存の諸世界の中で表現します。この時点で、キリスト・ロゴスと聖霊は人間のノエティカル体、サイキカル体、肉体を築き始めます。それらはキリスト・ロゴスと聖霊によってノエティカル界、サイキカル界、物質界が築かれるのと同様に築かれます。ミクロコスモスである人間は聖なるモナドの似姿であり、それと類似しています。

マクロコスモスを知るためには私達はまずミクロコスモスを知る必要があり、神を知るためにはまず人間を知る必要があります。創造の諸世界を知るためには、まずパーソナリティーであるセルフ・エピグノーシスの体である肉体・サイキカル体・ノエティカル体を知る必要があります。

（人間がマインドを使って形成する）欲望的想念および想念的欲望という形のエレメンタルとしてのマインドについて学び、知ることによって、私達は次第にサブスタンス、スーパーサブスタンス、構造、構造の手段としてのマインドを知ることが可能となります。自分達のパーソナリティーを学び、知ることによって、宇宙・創造・マクロコスモスを知るようになるでしょう。

\*Page2

私達の「インナーセルフとしての聖なるモナド」(Inner Self Holy Monad)は、その多様性とアウタルキー（＊自己充足）にある主なる父と類似しています。私達の「最内奥のセルフである聖なるモナド」(Innermost Self Holy Monad)は絶対英知・絶対パワー・絶対善です。聖なるモナドは（多くのイデアの一つである）人間のイデアを通じて、ノエティック界、元型・イデア・法則・原因の世界にそれ自身を輝きとして表現します。そして人間は永遠のセルフである魂のセルフ・エピグノーシス、つまりインナーセルフ、“I”（私）としての現れを有しています。人間における魂のセルフ・エピグノーシスは永遠の存在です。

人間のイデアを通じて来た、という始まりがあるのなら、なぜそれが永遠なのかといぶかるかもしれません。もちろん、それは現れとしては始まりがありますが、ヒポスタシス(Hypostasis、基礎・根本の意味)としてそれは過去・現在・未来において常に永遠なのです。再び繰り返しますがそれは三位一体であり、魂のセルフ・エピグノーシスとしてそれは（時間・空間の意味を越えた世界である）ノエティックおよび高次ノエティカル界にあります。

魂のセルフ・エピグノーシスの特質は、聖なるモナドのセルフの特質のミニチュア版ですが、異なる点は私達は絶対愛・絶対英知・絶対パワーの順序でそれらを有していることです。

なぜなら、私達は今やロゴス的現れ、Life（絶対愛に相当する生）の現れという属性を有しているからです。ロゴス的現れを有するので、私達にはリアリティーと真理を絶対的に理解するロゴス的セルフ・エピグノーシスがあるのです。

この時点からノエティカル界、サイキカル界、物質界においてパーソナリティーが築かれます。現在のパーソナリティーは特定の原理に基づいて築かれねばなりません。その原理とは、

永遠のアトムと呼ばれる魂のセルフ・エピグノーシスの質です。存在の諸世界(worlds of Beingness)と実存の諸世界(worlds of existence)の境界において、実存の諸世界に永遠のアトムを投射、現すことによって、魂のセルフ・エピグノーシスがもう一つのカラーを帯びるようになります。この投射の時点において、魂のセルフ・エピグノーシスは“永遠のパーソナリティーである魂のセルフ・エピグノーシス(Permanent Personality Self Epignosis)”という特質を帯びます。実存の諸世界に永遠のアトムが投射されることによって、ノエティカル体、サイキカル体、肉体としての現在のパーソナリティーが築かれます。

私達は今やパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスを有していますが、もちろんその特質は魂のセルフ・エピグノーシスのミニチュアです。

それはまた、現在のパーソナリティーの諸世界への魂のセルフ・エピグノーシスの寄託でもあります。寄託；この寄託についてキリストは“the talants”と言いました。誰かがそれを寄託し、評価を依頼するのです。

魂のセルフ・エピグノーシスがそれ自身の一部をノエティカル体、サイキカル体および肉体の永遠のアトムとして、

ノエティカル界・サイキカル界・物質界に寄託します。

それらは不定形な体を有する現在のパーソナリティーであり、現在のパーソナリティーはそれらを価値あるものとするために形を整える必要があります。

それらが再び魂のセルフ・エピグノーシスに戻るためです。

それらの体は何なのでしょうか？それらは現在のパーソナリティー以外の何物でもありません；知性、感情、そして肉体であり、現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスが聖霊とキリスト・ロゴスの恵みによってそれらを使用します。

**それらの体の中に、現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスが築かれています。**

ミクロコスモスである人間において、現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスは、永遠のパーソナリティーがそれ自身の一部を二元性と二元対極の諸世界に投射することによって築かれます。

永遠のパーソナリティーが永遠のアトムとして投射するその部分は無知の中に取り込まれ、Lifeの現象としての人間が生じます。

Lifeの現象として表現されるためには、中心点として、そしてLifeの現象の源として、私達がLifeそれ自体を有することが必須です。中心点としてのLifeのスパークは永遠のパーソナリティーである魂のセルフ・エピグノーシスから来ます。

絶対存在のマクロコスモスとミクロコスモスの間にはただ一つの違いがあります。それは私達のセルフの部分である現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスです。

現在のパーソナリティーとしてのセルフ・エピグノーシスは、価値ある諸経験を獲得するために苦難を通じて体験を積み重ね、苦しみ、奮闘しなければなりません。

価値ある諸経験はオントピーシス（＊ロゴスの降下を通じて個別性を獲得した後、再びオリジンである源に帰ること）に向けてインナーセルフ、魂のセルフ・エピグノーシスに与えられます。

以前、Lifeが限界と必要性（ニーズ）によって制限されていない存在の諸世界には調和があるが、Lifeの現れではなくLifeの現象の現れとして制限がある世界は、制限・必要性・無知に取り囲まれている、と述べました。Lifeの現象において、イデアとしての調和(Idea Harmony)がバランスに変り、その結果、二元対極の世界、意味の世界、人間による創造、人間の無知の結果としての創造が生じるのです。

\*Page3

ミクロコスモスである人間は、聖なるモナドとしてのセルフが自らの決意により、神の助力によって人間のイデアを通じてそれ自身の微小な部分を放射することを決めた時点から始まります。その瞬間から創造のセル(Cell of Creation)、生命の木におけるミクロコスモスとしての人間が始まるのです。

この瞬間から、そしてこの時間・空間の意味を越えたポイントから、魂のセルフ・エピグノーシスが始まります。魂のセルフ・エピグノーシスは「最内奥のセルフである聖なるモナド」(Innermost Self Holy Monad)の特質を完全に備えていますが、そのスケールは小さくなっています。なぜ、小さなスケールなのでしょうか？なぜなら、魂のセルフ・エピグノーシスは全体ではないからです。

人間は主なる父の似姿であると言うとき、それは現在のパーソナリティーに宿るスパークのことを述べているのです。実存の世界における現在のパーソナリティーとしての人間は神の似姿ではありません。なぜなら、人間は思考・行動の仕方の現れであり、神の本質的特徴の現れとは遥かに隔たっているからです。

したがって、私達は単にそのアイコン(icon)にすぎません。現在のパーソナリティーとしての私達の目的は、このアイコンを突破して、Lifeそれ自体であるインナーセルフの特質の表現である似姿になることです。

アークエンジェル達もまたアイコンであり、同時に神の似姿なのでしょうか？ちがいます。彼らは似姿であるだけです。なぜなら、アークエンジェル達の黙想は神の聖なる意志と寸分も違わないからです。

もちろん、もし人間が無知の中に取り込まれなかったなら、人間は決してオントピーシスを得ることはできません。言い換えれば、他の人間の“I'ness”（私であること）とは異なったものとして、“I am I”（私は私である）と言う能力を獲得することはできません。現在のパーソナリティーとして、人間の中には永遠で神聖な何かがありますが、無知の中にある限り、それは表現されていません。

無知の中にある人間は初めはアイコン(icon)に大いに執着しますが、主なる父に似ている内側のスパークを徐々に使い始めなければなりません。新しいアイコンをつくり、（古い）アイコンを映している鏡を壊すことができるようになるためです。これを達成することによって、そのパーソナリティーは半神、エゴの様々な側面を殺すことのできるヘラクレス（＊ゼウスの子で不死を得るために多くの功業を遂行した、ギリシャ神話最大の英雄）になるのです。ギリシャ神話によれば、それら（＊エゴの諸局面の退治）はヘラクレスの10の功業です。部分的に神であるヘラクレスは権威とパワーをもって、それらエゴの怪物を退治することができたのです。

人間にそれができるでしょうか？できます。しかし、全て良いものは骨を折って労しなければ獲得できません。各パーソナリティーは自分自身でそれを達成しなければならないのです。前に進むにつれて、私達の真理の探求の上昇の道において自己実現を達成できるよう、絶対存在が私達に与えてくれた全ての助けに気づくようになります。

探求を通じて私達は知り始めますが、ドグマティズムからは自由であることが重要です。そして知り始めると、私達は神の偉大さを前にしてひざまずくようになるでしょう。もちろん私達は、周囲そして内側にある偉大な神の働きのスケールを理解するには、余りにも小さい存在ですが。

私達自身が真理になるまでは決して真理全体を知ることはできません。

しかし、上昇の道において、私達のセルフ・エピグノーシスが思考・行動の仕方としてそれを可能にする限りにおいて、私達は相対的真理の様々なレベルについて知るようになるでしょう。

上の如く下もしかり、という言葉をもう一度思い出してください。最大の中と同じように最小の中もそうなのです。マクロコスモスの如くミクロコスモスもそうなのです。

私達は常に主、絶対、神の聖性の中に抱かれています。

MAC5/ENM/DOC/DOP/001